

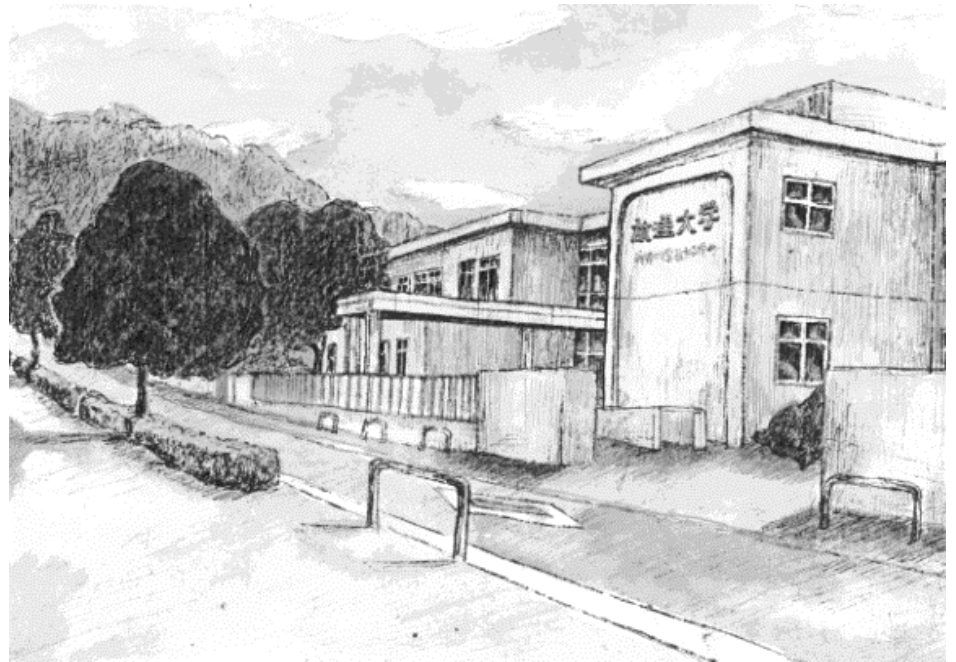
UA 神奈川学習センター

1998年1月1日
第1巻 創刊準備号(通巻1号)

初だより

ハイライト

- 1 神奈川学習センターの前景
フィスターンの言葉
- 2 人生の転機
振り向けば日溜まりの中
- 3 イギリスのダラムを
訪ねて
- 4 テオリアについて
学生募集
編集後記



自分の中の芸術をおもてに現すのは、まともな人間誰にとっても非常に健康にいい。自分の中の芸術を何としてでも外に出すのは、まともな人間誰にとっても大切なことである。ゆたかな健全な活力を持った芸術家は、やすやすと呼吸し、やすやすと汗をかくのと同じように、やすやすと自分の芸術を外にだす。しかし、力のたりない芸術家では、これが圧力となり芸術家気質と称するはっきりした痛みを生ずる。こういうわけで、本当に偉大な芸術家は、普通の人間でありうる。

G.K.フィスターン

放送大学神奈川学習センター
〒232 横浜市南区大岡 2-31-1
電話番号 045-710-1910
FAX 番号 045-710-1914

人生の転機

吉田 昭二

35年の技術者としての会社勤めから解放され、2年のモラトリアムの後高校の講師として第二の人生を歩み始めた矢先にふと見付けたのが放送大学の募集広告だった。取り敢えず選科に入学して2年間（平成元年度及び二年度）、手当たり次第、気の向くままに科目を選択して勉強している内に40年以前の学生時代を思い出、全生科になって卒業にチャレンジする意欲が湧いてきて平成3年度1学期に「人間の探究」専攻で3年次に編入学した。4年かかって卒業（平成7年3月）、次いで「社会と経済」専攻で再入学、これは2年で卒業（平成9年3月）、「自然の理解」専攻で再々入学し現在に至っている。

私は平成9年4月で満70歳になった、物心が付いてからの60年を振り返ってみるとあの時が正しく人生の転機であったと思いついた時期が何回かある。

まず、昭和20年8月に海軍兵学校から復員して旧制高校の編入試験に合格した時（同年11月？）が最初の転機だった。

二番目は大学を東京にするか、京都あるいは大阪にするかで悩んだ時期だ。卒業後の就職は学部と学科の選択で或る範囲に限定されるので悩みもなく、35年間の会社勤めに入った。

三番目の転機は昭和43年からの数年間だ、昭和43年秋に左眼が葡萄膜炎になり、6年間の治療もむなしく49年12月に左眼失明し摘出手術に至った。治療中も摘出後の病理分析の結果でも、葡萄膜炎の原因



振り向けば日溜まりの中

伊藤 芙美子

好奇心が旺盛のためか、生活自体が忙しすぎたのか、およそ過去に目を向けることはなかった。回し車を回すネズミのように一歩前に足をささなければたちまち軌道からはずれるか、後から来た人に足を蹴られるような、そんな時の過ごし方をしてきたように思う。ましてや放送大学に通っている間は、レポート提出、単位認定試験が生活の中に突き刺さってくる。ポーと佇んでいたりしたら何らかの傷になっていただろう。歩幅はその都度変わってはいたが、足は絶えず前を向き前進し続けた。そんな生活が私のエネルギーの源でもあり、生きている実感でもあった。卒業して早二年余りが経とうとしているが、生活振りには余り変わったとは思えない。同窓会、クラス会等の催しに参加すれば

が不明でペーチェット病の疑いが残るとの事で何時右眼に来るかも知れないと思うと仕事にも身が入らず読書に専念したものだ。以来20余年、幸い右眼は健全だが、今から思えばこの数年間が最大の人生の転機であったと思う。

四番目はもちろん放送大学に入った時期だ。現在に至る9年間は3年間の高校の講師を経て趣味で始めたパソコンを利用したアルバイトもしたが何よりも放送大学が生き甲斐になっているようだ。放送大学9年間の成績は下表の通りで可も不可もないと言ったところだが今後の目標としては6専攻すべての卒業を目指して頑張るつもりだ。

| | 科目数 | 認定単位 | 割合(%) |
|--------|-----|------|-------|
| A+ | 23 | 47 | 16.7 |
| A | 24 | 48 | 17.4 |
| B | 34 | 70 | 24.6 |
| C | 23 | 46 | 16.7 |
| D or E | 34 | 0 | 24.6 |
| 合計 | 138 | 211 | 100.0 |

(注)・上記の割合は受験科目数に対する割合を示す。
・D or Eには認定試験を欠席したのも含む。

楽しいと思うものの、近況報告の名の下に自慢話が飛び交う位が関の山と高を括っていたので積極的に求めるものではなかった。思い出の中に生きるのはもっと先でよかった。

久しぶりに静かな時が流れまどろんでいた、そんな時であった。「会報が返送されてきましたので住所の確認を。」小学校の同窓会事務の方からの電話。尋常小学校、国民小学校と名を変え歴史を刻んできた母校では、数年前に開校百周年を祝い記念行事が催され、同窓会はその折りに発足した。会長を始め役員の方々は皆ボランティアで、少しでも多くの同窓生の名簿作成のため頑張っているとのことだった。余裕のある時間を過ごしていた私は、他人の話に耳を傾ける姿勢ができていたのかもしれない。「大変ですね。私に出来ることがあったら。」そんな言葉を口にした時は、ほんの社交辞令のつもりであった。よく通る歯切れの良い声が一段と弾みをつけ、「是非、幹事に！旧姓は？」「です。」と私。「ワー、お姉さまを存じ上げています。よかったわ。最初に貴女に電話を掛けようと思ったのは、私も貴女と同じ、フミコだからな

の。」気が付いたときには電話は切れ、『幹事』の二文字が肩にのしかかっていた。

一ヶ月後に迫った同窓会のため、古い住所録を片手に朝な夕なに電話をかける日々が続いた。留守番電話に託すには余りにも長い年月が過ぎ、十数回掛けたこともあった。兄弟のように仲が良く、異性を意識したことは無かった元男子生徒達に、何故か胸の高鳴りを押さえながら掛けた電話。少しは名前が知られていると思っていたのに、自惚れ屋の高い鼻も数日後には少々すり減って、惨めさや淋しさを嘔みしめたりした。そんな日々を重ねながら、確実に懐かしい心安らかなものが私を満たしていった。幼い自分に会う旅は、ただ元来た道を辿るだけではない、思ったよりはるかにエキサイティングであった。

こんなに緩やかで短い坂道であったのか。住宅が密集し、迫ってくるような通学路。十月にしては暖かな、突き抜ける程高い青空が母校をぼっかり包んでいた。在ったはずのものが無くなり、見たことも無いものが存在しているが、あの檜の木、そしてこの大地は、まぎれもなく私の小学校。同窓会の当日、来賓接待の役

をいただいた。二階の控え室から何気なくのぞいた窓の外。「フーミちゃん、ここよ。」何本かの手が私にふられている。「ワー」、私は両手をあげて答える。小さかったモミジの手が荒波を泳ぎ切ってヤツデのように変わろうとも、日の光に黒々と光沢を放ってゆれていた髪は輝きが失せ、白いものがはっきり目立とうとも、そして、風に吹かれ、たおやかにゆれ動いていたあの若木のような体が、大地にしっかり根を生やしている大木のようになろうとも、あの笑顔、あの笑い声はあの時と同じ。封じ込めていた思い出が小さな花となりこぼれ咲く。なんとあたたかくていい気持ち、まるで日溜まりの中

《空高く 集う笑顔は 子に戻り》



イギリスのダラムを訪ねて

川村 嘉子

10年間在籍した放送大学を平成7年3月に卒業した私は、以前から心に留めていた『神奈川国際交流・南サークル』のメンバーになりました。理由はごく単純で、私は言葉を使うこと、つまり、読んだり、書いたり、聞いたり、話したりすることが好きなのです。それらを英語で表現することが長年の夢でした。

20年ほど前、南区に住む数人の主婦によって始められた南サークルは、現在では横浜に在住する外国婦人（夫の赴任で家族と共に来日）の間に広く名が知れ渡って、活発な国際交流が行われています。そこで知り合ったアンを訪ねて、昨年10月、3週間のイギリス旅行をしてきました。

ダラムは、スコットランドとイングランドの国境に近く、ヨークとエジンバラを結ぶ中間にあります。ロンドンのキングスクロス駅から北へ向かう列車で約3時間、アンに住むダラムは、ウィアー川に囲まれた小さな城塞都市です。ヨーロッパの多くの都市がそうであるように、このダラムも町の中心に広場があり、市庁舎、教会、商工会議所などの古い建物がその広場を取り囲むように並んでいます。なだらかな石畳の丘を上ると、12世紀に建てられた城とロマネスク様式の荘厳なカテドラルが訪れる人々を圧倒します。900年も前に大司教の館として使われた城が、今なおパブリックスクールとして機能していることに驚きました。ギ

シギシと音のする廊下を歩きながら、古い城の中を10数人の外国人観光客と一緒に見学しました。学校の職員がこと細かにガイドをしてくれましたが、使われているのは典型的なクイーンズイングリッシュ。盛んに質問している外国人に混じって日本人である夫と私の耳には、時々知っている単語が聞こえてくるだけ。判ったふりをしながらガイドの後について行きました。アンによると、真夏の観光シーズンでもここを訪れる日本人はほとんど無くて、この小さな町にとって、私たちは遠来の珍客でした。

あれから1年が過ぎました。私は相変わらず南サークルで国際交流を楽しんでいます。9月は新しい年度の始まり。日本を去る人、また、来る人、さまざまな出会いと別れの時です。緊張感と期待感の中で私は今、オープニングを待っています。



テオリアについて

先日の日曜日、ひとりの学生が学習センターへ急いで入ってきました。どういうわけか、かれはひと抱えもある荷物をキャリアに乗せて、玄関ホールを通り抜けていきました。ふつうの通学スタイルではありません。何の荷物だろうかと、それとなく気になりました。かれは荷物を図書室に持ち込み、中身を机の上に並べ、それからおもむろに原稿用紙を取り出したのです。荷物は、卒業研究に使う文献でした。

さあ、これから一日原稿に取り組むぞ、という心意気がびんびんと伝わってきた瞬間でした。このときの気分の昂揚がいかほどのものかは、ちょっと何かを書いたことのあるひとならば、すぐ分かることでしょう。もっとも、この一瞬を逃さず、うまく利用できるひとは、ほんの一握りでしかないことは、まことに残念ではありますが。

さて、この一瞬を支配したであろう精神の状態を、テオリア(観照)とよんでおきます。テオリアは「眺める」という言葉からできたので、のちに理論という意味のテオリーを生み出しました。あるがままに、物事をみようという態度です。かれには、家庭や職場から少し離れて、自分の問題に対峙したいという希望があったのだと思います。大量の文献を集めて読んだあとで、それを横において、もう一度あるがままに見る必要があったのです。

この言葉はふつうプラクシス(実践)の反対語だとされるのですが、ここではポイエシス(製作)に对照される言葉だと考えておきます。かれが論文を「製作」しようと考えたときに、このきっかけをつくったのは、問題がありのままに見ようとするテオリアがあったからだ、といえます。そしてまた、それにもましてテオリアが重要なのは、製作にあって、より良い製作を目指そうとするときには、やはりテオリアが必要だということでしょう。よく「眺める」ことは、よい「製作」に通ずると思われま。

ところで、この学生は、めでたくテオリアを成し遂げることができたでしょうか。ここで感心するのは、古代ギリシアのテオリアの物語がほんとうによくできていることです。テオリアをうまく行使できた製作であればあるほど、製作の成就とともに、はじめのテオリアは消滅することになるというの

です。テオリアの成就是テオリアを消滅させるのです。けれどもそれと同時に、新たなテオリアを産み落とすきっかけにもなるのです。つまり、めでたく成就などということは、テオリアにはあり得ないのです。

つぎの日曜日、かれの様子を見るのが楽しみです。なぜならば、テオリアは結局のところ外側に存在するのではなく、内側に存在するからです。かれというのは、もちろん自分の中の、そしてあなたの中の「かれ」のことです。
(sense)

平成 10 年度第一学期

学生募集のお知らせ

出願受付期間:

平成 9 年 12 月 15 日から

平成 10 年 2 月 15 日まで

授業開始:

平成 10 年 4 月 1 日

放送大学の募集要項をご希望のかたは、神奈川学習センターまではがきか電話でご連絡ください。無料で郵送いたします。

・神奈川学習センターだよりは、Internetのホームページとの連携を計画しています。

<http://www.dango.or.jp/ua-kanag/Index.html>(現在、準備中)

Emailの宛て先は、
social@u-air.ac.jp

次回の予告

次号は、「卒業と入学」「放送大学の思い出」という特集を予定しています。

原稿を募集いたしておりますので、編集部宛てお寄せください。

イベント

・人間学研究会例会

開催日時 1998年1月11日
13時から
開催場所 神奈川学習センター

・WELCOME MEETING

開催日時 毎月第二木曜日と
第四水曜日
開催場所 神奈川学習センター
英会話の学習と外国文化に親しむ活動を行っています。

神奈川学習センターだより編集部

発行者 浜口允子
編集者
五十嵐、遠藤、星、
加藤、中村、皆川、吉田、
山本、望月、坂井

後記

神奈川学習センターだよりは、1998年3月創刊を目指して、現在、試行錯誤を繰り返しております。今回、皆様のご意見をお聞きするために、創刊準備号を造ってみました。ご意見とご要望を是非お寄せください。神奈川学習センターか、あるいはお近くの編集員にお知らせくださればありがたいと思います。

UA-Kanagawa
[The University of the Air
Kanagawa Study Center]